

嘉右衛門とおおかみ

この物語は村の衆の男達が未だチヨンマゲ頭で西山（につしやま）（注1）に狼が住んでいたころのお話です。

その当時お城下白石の町から米沢や出羽の国（現在の秋田県・山形県）に行くには必ず西山の峠を越えねばなりませんでしたが、里の村人も山仕事にはこの峠を登り下りしました。その峠は麓の部落に通じる山道の数だけありますから、西山には沢山の峠がありました。

その峠道のひとつは南沢沿いにある峠道で、重い荷物を背負った人や荷をつけた牛馬が歩けるように九十九折りになっているので、多くの人たちに利用されました。その道を里に下りたところに嘉右衛門という若者が住んでいました。

嘉右衛門はよく働く若者で、家業の百姓をしながら村の衆と一緒に西山の峠越をする旅人を乗せる駕籠をかついたり、商人の重い荷物を運んだりして、家計を助けていました。真面目で正直者の嘉右衛門は旅人や商人から好かれ、やがて名指しで仕事を頼まれるようになりました。そして高価な品物や結構多額のお金などを運ぶ仕事も個人で頼まれるようにもなり、遠くは米沢や上山の方まで泊がけで出かけることもありました。

山の木々が色づき始め、すすきの穂がふわふわと白くなつたある秋の夕暮れ、嘉右衛門は客に頼まれた品を届ける仕事を終えて帰り道『逆さケヤキ』辺りまで下つてくると、いつもこの辺で遠巻きに出会う一匹のおおかみが道路を塞ぐようにして立っていました。いつもなら道を空けて通してくれるはずのおおかみでしたが、今日は様子が少し変でした。低いうなり声を出しながら口から涎を流していました。嘉右衛門は

いつもと違うとおおかみが怖くなり、遠巻きに道はずして遠ざかろうとしましたが、おおかみは嘉右衛門の少し離れた後ろを何処までもついて来るではありませんか。いつもなら人間をからかうように前後左右を駆けめぐるおおかみが、首と尾っぽをだらりと下げてとぼとぼとついてくるので、嘉右衛門は双子の山の神さまの木立がきれて少しひろくなっている所で立ち止まりました。

だいぶ日も西に傾き茜色の雲も黒ずみ始めてきましたが、おおかみの困った顔の様子は嘉右衛門にもはっきりわかりました。相変わらず涎を垂らし低くうなり声をたてているのですが、何か訴えるような目だと嘉右衛門は思い、怖ごととおおかみに近づきました。うなり声は少し大きくなりましたが、おおかみは逃げようとしません。手も届く距離になったとき突然おおかみは口を大きく開けて吠えました。一瞬、嘉右衛門は後ずさりしましたが、おおかみの口の中に何か変なものがあるのをしっかりと見ました。

嘉右衛門は手を伸ばしながら逃げ腰の格好でおおかみに少し近づきました。そして、とうとうおおかみの鼻に触ることが出来ました。

おおかみ唸り声は相変わらずですが、お座りをして少しも動かず、嘉右衛門に触られるままじっとしていました。

嘉右衛門は両手で涎だらけのおおかみの口をあけて中を覗きました。奥歯から喉にかけて何か白く堅いものがあるので、夢中で手を口に押しこんでその白いものを力まかせにつかみ取り出しました。

秋の小寒い夕暮れなのに、嘉右衛門は体中にびっしりと汗をかいたのをしばらくたってから気づきました。

おおかみは一声吠えてから西山の林の中に消えました。

嘉右衛門は口から取り出した白いものは鳥か獣の骨だったなと思いつつ、すっかり暗くなった南沢を急いで下って家路につききました。

嘉右衛門の家でもすっかり秋の取り入れが済み、雪の正月を迎える季節になました。

雪のある時期は飛脚の仕事もないので、嘉右衛門はのんびりと家の周りで出来る仕事を手伝う日々でしたが、どうしても急いで関の町（注2）まで品物を届けてほしいという白石の商人からの頼みがあり、雪の晴れ間をみてでかけました。蓑笠にわら沓、それにかんじきという出で立ちでしたが、案の定南沢を越えた辺りから段々と西山の雪は深くなりました。双子の山の神さまに正月の挨拶をしながら一息入れていると、祠の後ろの山からおおかみの遠吠えが一声聞こえました。

一息入れた嘉右衛門はまたゆっくり山道を登り出したとき、行く手に大きなけものが現れ、嘉右衛門をじーと見ていました。最初は冬毛になったカモシカかなと思いましたがよく見るとおおかみです。嘉右衛門は少したじろぎましたが、知らんふりして歩き出しました。しかし、お

おかみは嘉右衛門の前を一定の間をおいて歩いて行くのです。嘉右衛門が早足になるとおおかみも早足になり、わざとゆっくり歩くとやはりゆっくりになりました。

『逆さケヤキ』に着く頃にはすっかり道が雪で覆われ、かんじきを履いていても膝まで雪に埋まり、歩くのもたいそう難儀でした。特に吹きだまりに入ると腰まで埋まってしまいます。先を歩くおおかみは雪に埋もれて歩くのが難儀な所を避けて歩き、まるで道案内をするように嘉右衛門の前を歩きました。

里から『逆さケヤキ』まではいつもなら嘉右衛門の足で四半時（三十分）の道程でしたが、今日のように雪の日は半時（一時間）はかかります。嘉右衛門は西山を越えるときは必ずここで一服をするのを楽しみにしていました。ケヤキの正面にある山梨の木の根元の小さな『休み石』の雪を払って腰を下ろした嘉右衛門は、天に向かって大きく手を広げ

たように伸ばしたケヤキの枝のすぐ近くを流れる雲を眺めるのが大好きでした。またここからは東の彼方の水平線に白波が立っていそうな海も見えます、その北のほうには、たった一度だけ行ったことがある伊達の殿様のご城下町（仙台）も見えるような気がしました。

突然、一陣の風がケヤキや嘉右衛門を襲いました。周りの木々の枝に花のように付いていた雪が一齐に空に舞い上がり地吹雪が起きました。それが日の光を得てキラキラと輝いたり虹のように色づくのを見せてくださいました。笠を取って休んでいた嘉右衛門の襟首から粉雪が入り込み、背中まで濡らしました。一瞬我に返った嘉右衛門はスカリを背負い笠をかぶりかんじきの紐を締め直して歩き出そうとしたとき、さつきのおおかみがまだ近くに居ることに気づきました、そしてそのおおかみの顔や姿勢格好はどこかで見たような気がしました。

嘉右衛門は冬毛になったおおかみを見ても去年の秋の出来事を思い

出すのに少し時間がかかりました。

吹きだまりが多く、西風で吹きさらしの『梨の木平』を通り沼田入り峠の十字路にさしかかるときも、おおかみは嘉右衛門の行き先をまるでちゃんと知ってるかのように二、三間前を付かず離れず歩きました。小原の新町の部落が見え始めた所まで来たとき、おおかみは道をはずれて少し高台に登り一声遠吠えをしてから林の中に姿を消しました。雪中、嘉右衛門はおおかみの姿が見えなくなるまで見送りしました。

それからというものは、嘉右衛門が西山の沢山ある峠のどれを越えて行くにも、そのおおかみは先に立って一緒に歩きました。一人で山仕事に行くとき、群れのおおかみは大変危険で怖いものと里人は代々教えられていました。嘉右衛門も親から「群れのおおかみと子連れの際には気をつける。」と子どもの時から耳にたこがよるほど聞かされてきました

が、このおおかみと歩くようになってからは一度も子連れの際には会わなくなりました。しかし、一度こんなことがありました。

それは、秋も過ぎ初雪が西山の西の花房山に来た頃の出来事です

嘉右衛門は何時ものように『逆さケヤキ』を上がった峠付近で冬支度のひとつの薪を集めていましたが何時ものおおかみが出て来て嘉右衛門の腰のあたりをぐいぐいと頭で押しつけるではありませんか、「なにかあるな」と感じた嘉右衛門はおおかみのなすがままに押しつけられた方に押されたまま動きまわりました。そこは獣道の風下で木の葉のたつぷりたまつた溝のようなところでした、おおかみは溝の木を前足でかき分け隠れるような仕草をするので嘉右衛門も面白半分おもしろに溝に隠れてみました、おおかみは真剣に急いで嘉右衛門に木の葉をかぶせていきます。嘉右衛門は溝の中で「木の葉と土の匂いはキノコの匂いと同じだ」と思いつながらじつとしていましたが、やがて近くを多くのけものたちが通る足音

がキノコ臭い土から伝わり嘉右衛門は「あれは群れのおおかみだな」と思いました。そして今回はおおかみに助けられたなと思えました。

西山の根雪もあらかた消え、この里山にも春が巡ってきました。田畑の仕事に未だ早い時期に里人は、山菜採りに精を出します。

嘉右衛門も飛脚の仕事が一段落すると、大きな竹かごを背負って西山によく出かけます。勿論、山菜の採れる場所は里人のだれよりもよく知っています。その日もぽかぽか陽気に誘われ、一人勝手の知った南沢の米沢街道を上り、綿のように暖かそうな白い雲がポツカリ、ポツカリ浮かんだ空を時々仰ぎ見ながら西山に入りました。コゴミ、ウルイ、タラの芽、ウド等でたちまちかごは重くなり、帰り支度を始めた嘉右衛門はふと「今年のシドキはどうしたかな。」と思い、よせばいいのに『逆さケヤキ』の南側の崖のような急斜面を下り始めました。慎重にその辺にある木の幹や枯れ草の根元を掴みながら下りましたが、雪解けの沢は

滑ります。それに掴んでいた木の根は凍みあがった地表と共に簡単には
がれます。嘉右衛門は腰をつき最初はゆっくりでしたがやがて急に滑り
だしてしまい、背中や頭を木の根っこや石にぶつけながら滑り落ち、
次第に気が遠くなってゆくところまで覚えていました。

体中が痛くて冷たいのですが顔だけ生暖かいもので拭かれていますよう
な気がして嘉右衛門は目が覚めました。辺りはすっかり暗くなっていま
した。

起き上がろうともがきましたが、身体からだの節々が痛くて体がいうことを
ききません。側そばにはいつものおおかみがいて顔を一生懸命いっしょうけんめいなめていたよう
でした。後で気づきましたが、顔も沢の水にすっかり漬かっていたのをお
おかみは着ている着物の襟や肩の辺りを口でくわえ水から引き出して
くれたようです。着物に噛まれた歯形の跡がぼろぼろになって付いて
いました。

やっこの思いで水から這い出した嘉右衛門はこの場所がどこなのか考
えました。体温も少し上がり頭の痛みも和らぎ始めてきて少しずつ思い
出しました。ここは南沢の最上流でまぼろしの滝の滝壺だということが
だんだん分かってきました。

おおかみは少し離れたところで心配そうに嘉右衛門を見えています。
嘉右衛門は腰を下ろしたまま何度も何度もおおかみにお礼をいいまし
た。

一時いっとき（二時間）ぐらい過ぎたでしょう。か、谷間の上の辺りが少し明る
くなつたようです。月が出たのでしょうか。でもこの深い谷の底までは光は
届きません。嘉右衛門は手探りで滝壺の流木で杖になるようなものを
探しました。そしてやっこの思いで立ち上がってみましたが、滑り落ちた
崖がけを登ることはこの体では到底出来なとうていいことを知りました。

「家でも心配しているだろうなあ」と思うと気持ちだけが焦りまし

た。そして南沢を谷に浴つて下ることに決心しました。

道もない谷底は冷たい水とごつごつした岩だらけで、杖をついた嘉右衛門にとって歩くのはとても難儀でした。いつもなら二、三間前を歩いていたおおかみは今夜は嘉右衛門にぴったりと寄り添って歩けそうな道を探しながら歩いてくれました。夜が白々と明け始めたころ、やつと里の入り口にたどり着きました。嘉右衛門はまた何度も何度も礼を述べ、おおかみと別れました。

やつとの思いで家にたどり着いた嘉右衛門に、家の人達は「ゆんべは心配したぞ。うわあ、けもの臭い。おおかみにでもやられたか。夜が明けたら村の衆を頼んで山狩りする相談してたところだ。」と言うので、嘉右衛門は秋の出来事から昨夜までのことを話すと家人達は「そんなめがいとおかみもいるんだ。」と感心して聞いていました。里の人たちにとって、おおかみは家畜を殺したり人間を襲ったりする憎い動物で、出来れば

皆殺しにしたい存在でしたが、その出来事以来嘉右衛門の家ではその考えを改めたようでしたし、その噂が広がると部落の人達もおおかみの悪口を言わなくなりました。

夏の終わり頃、嘉右衛門に急ぎの仕事が入りました。伊達の銀山半田山(注3)に大切なものを届ける仕事でした。越河の関所は嚴重で、しかも抜けるのに大層な時間がかかるので、関所を通らない山道に行くことにしました。西山の尾根伝いに雨塚山の麓を通り桑折に出る山道ですが、関所を通らない抜け道だけに、いかがわしい人たちやおいはぎ、山賊がよく出没します。しかし、嘉右衛門には歩きなれた道ですから、今年の秋のお彼岸に仏間に飾りつけをする花の品定めをしながら秋の七草(注4)を復唱し、「なぜこんなに綺麗な花が咲くフシグロセンノウが入っていないのが納得いかないなあ。」と独言を言いながら歩きました。用事も済み、この分だと日のあるうちに家に帰れると思ひ、汗ばんだ頬

に涼すずしくなつた風を感じながらのんびりと尾根道を歩きました。空の雲はもう夏雲ではなく薄うすくて冷たそうな雲でした。嘉右衛門は、やっぱりもう季節は秋なんだなあと思いました。

もう少いで部落に通じる峠の手前に来たとき、見知らぬ数人の若い男達が道を塞ふさいで立っているのが見えました。手に手に長い天秤てんびんぼう棒（注5）のようなものを持っていました。嘉右衛門は係かかわらないようにと遠巻きに避さけて通りすごそうとしたとき、その内の一人が声を押し殺すように「兄さん、痛い目に遭あいたくなかつたら金を貸かしてくれ。」と言いました。嘉右衛門はこれが噂で聞いてたおいはぎかと思ひながら「俺おれは旅人たびびとでねいから金を持ち合わせていね。」と言うとその男は「その背中に背負せおっているもの置いていけ。」と言う。これは客から預かつた大切な品物、この馬鹿どもに渡してたまるかと思ひ隙すきをうかがいながら男達を観察かんさつすると、皆が遊び人風ふうで山など走れそうもないことに気がつきました。そして、

一瞬すきの際に嘉右衛門は走り出しました。最初は棒など振り回して威勢いせい良く後ろに付いて走って来ましたがだんだんと離れだし終いには走れなくなつたようです。そのうちの一人が棒を捨て本気まこゝろで追いかけてくる様子でしたが、嘉右衛門は息も切らさないうで余裕よゆうで走りました。中峠なかとうげから「逆さケヤキ」辺りまで来たとき、嘉右衛門にはおおかみの遠吠えが聞こえました。大分遅れて一人の男が追ってきましたが、余裕よゆうの出た嘉右衛門は少しからかつてやろうと思つてケヤキの根元ねもとで休むふりをしていました。若い男は走つたのと怒りで顔を真っ赤して「てめーなめんなよ。」と言ひながら迫おってきました。手には七首あいくちを握にぎっていました。嘉右衛門がまた走り出そうとしたとき、ケヤキの北側の斜面しやめんからおおかみが唸りながら一直線に駆かけ下り若い男の七首しちびしを持っている手に飛びつきました。若い男は七首しちびしを放り出しながらもんどり打つて尻しりもちをつきました。足が上に伸びたところをまたがぶりと噛まれた若い男は大きな悲鳴

を上げながら四つんばいになって逃げ出しました。後の若い男達もその悲鳴ひめいを聞き後ずさりをして逃げ出しました。

枝が垂れ下がって地面に着くくらい葉を一杯付けていた『逆さケヤキ』の下で、おおかみの頭やからだをなでながら嘉右衛門はまたおおかみに礼を言うことになりました。おおかみはそのお礼のお返しに嘉右衛門の顔を以前滝壺でしたようにペロペロとなめ回しました。嘉右衛門がのけぞりながらふと空を見上げると、夕焼け雲と夏の盛りを過ぎて黒ずみ始めたケヤキの葉っぱが目に入りました。

このおいはぎ事件が部落の噂になり、白石のご城下町の商人達あきんどの耳にもはいると、嘉右衛門の飛脚の仕事は仲間なかまもうらやむほど大そう忙しくなり繁盛はんじょうしました。

何年かの歲月さいげつが流れました。その間におおかみは何回も身ごもって子

どもを育てたようです。嘉右衛門には子供達を見せてはくれませんでした。が、お腹が大きくなった後におっぱいを大きくしてお乳をたらしながらも、いつものように嘉右衛門の仕事に付き合ってくれました。

そんなある年の秋、取り入れもすっかり終えた嘉右衛門はお嫁よめを貰いました。賢かしこくて働き者のお嫁さんでした。嘉右衛門は今まで以上に家の仕事も飛脚の仕事も精を出して励はげみました。

ところが、その時期以来、嘉右衛門が西山に何回入ってもおおかみに会うことはありませんでした。嘉右衛門は仕事も手に付かず、毎日西山に入りおおかみを探しましたが、見つけることは出来ませんでした。探しあぐねた嘉右衛門は精根尽せいこんつきた顔で口の中で何かぶつぶつ独り言を言いながら夢遊病者むゆうびやうしやのように山の中をさまよいました。

嘉右衛門は「しまった！なぜ今頃思いついたのか、おおかみに名前をつけてやることを。」と何度も何度もつぶやいていたのでした。

また数年が経った秋の日に嘉右衛門はキノコを採りに西山に入りました。『逆さケヤキ』の北側一帯は嘉右衛門と嫁さんが働いて貯めたお金で買い求めた嘉右衛門山（注6）です。その山の中頃に毘沙門堂（注7）がありました。そのお堂の周りにはヨシタケというキノコが毎年たくさん採れます。嘉右衛門は夢中でそのキノコを採っていると、大きなクヌギの木の根元に動物の骨があるのを見つけました。嘉右衛門はすぐにそれが探していたおおかみの骨だと気づきました。嘉右衛門は一杯採ったキノコをかなぐり捨てて、その骨を全部拾ってお弁当を包んできた柿洪塗りの和紙に丁寧（ていねい）に包み家に持ち帰りました。

次の日から嘉右衛門は朝早くから夜遅くまでケヤキの木で祠を作り続けました。出来上がった祠を背負い、おおかみの骨を大事に胸に抱いて嘉右衛門はおおかみと最初に出会った『逆さケヤキ』まで南沢を登りました。西山の雑木達はすっかり葉を落とし嘉右衛門のわらじを足首

まで埋めてカサカサと音をたてました。嘉右衛門は大きな涙をポロポロ落としながら、おおかみと出会ってからのいろんな出来事をひとつひとつ思い出しては大声をだして泣きました。

『逆さケヤキ』に着いた嘉右衛門はその根元に穴を掘り丁寧におおかみの骨を埋めました。その上に祠（注8）を建て最後に残しておいた牙を一つ祠の扉の中に入れました。それは嘉右衛門がここを通るたびに扉の中のおおかみに会えるような気がしたからです。

真っ赤に泣きはらした目で嘉右衛門はケヤキの枝を見上げると葉っぱを落とし、来春のために準備した芽の付いた梢の間から真綿のような雲と、どこまでも透き通った薄い水色の空が見えました。

終わり

注 1. 白石川で切断され、それより越河まで続く町の西側に連なる山並みを里人は西山（にっしゃま）と呼んでいる、最高峰は鉢森山で標高五百五十四メートル。

注 2. 現在の七、宿町の中心の町。

注 3. 江戸期の末から明治にかけて大層栄えた福島半田山銀山。

注 4. ハギ、ススキ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ。

注 5. 両端に物をつり肩でかつぐ長い棒。

注 6. 現在の地図にもこの地名が記されている。

注 7. 毘沙門堂はこの地から江戸時代末に現在の場所に移転されたもの。

注 8. 逆さケヤキの根元にある二つの祠の内の東側がそれで 1980 年ごろまで木造の祠だったが朽ち果てしまったので現在のものに替えている。祠の管理は中目の松野家が現在も行っている。

嘉右衛門ケヤキの会 会員 八 島 忠 賢 作

平成十九年二月